
転生してお先真っ暗

パンダサン1121

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生してお先真つ暗

【Nコード】

N2460Q

【作者名】

パンダサン1121

【あらすじ】

なぜだかよくわからないうちに転生してしまった主人公。

何の説明も受けずに転生された世界はハルケギニア。

原作知識、神がくれた能力、そんなもの関係なしにお先真つ暗。

生前は可もなく、不可もなく、特別な不幸もなければ幸運だったこともない、そんな彼に待ち受ける未来は厳しい。

彼は果たして幸福を掴み取ることが出来るのか？

それとも絶望のままハルケギニアの土になるのか？

突然の下り坂人生を歩む主人公の物語。

プロローグというより経緯の説明

さて、まずは俺が生まれるまでを説明せねばなるまい。
後ほど説明するが、俺は転生したらしい。
異世界に。

突然のことで驚いた。

どうやら俺は死んだらしい。

なぜ、どうやって死んだのかはわからない、思い出せない。

とにかく俺は三途の川の前にいて、今から渡し守に彼岸まで運んで
もらうらしい。

戻るという選択肢はない。

後には直視できないようなおぞましい闇が広がっていて、彼岸には
華やかな神殿が見えるのだから。

列に並んでしばらく、俺の順番が来た。

渡し守が手を出して何かを求めるが、なにを求めているのかわから
ない。

そう素直にたずねると、渡し守は首を横に振り、横を指差す。

すると隣にも1隻の舟があり、渡し守が手招きしている。

渡し守は笑顔で俺を迎え、お茶を出したり、手ぬぐいを出したりと
世話を焼いてくれた。

さっきの無愛想なほうよりこっちの方でよかったと思った。

すでに2人舟に乗っており、お茶を飲んでくつろいでいる。

俺も舟に乗りお茶を飲み始める。

さらにしばらくすると、何人か舟に乗り、ようやく舟は出発した。
出発してからは早い。

川を横断するだけなので当然だが。

舟が岸に着き、降りたところでこれまた愛想のいい小鬼達が出迎え整理券を渡してきた。

整理券には何か書いてある。

数字だろうか。

そのうちの1匹が神殿まで案内してくれある部屋の前まで案内してくれた。

部屋には張り紙がはってあったが何が書いてあったかわからない。

俺の知らない言語だった。

小鬼は自分の整理券の番号を呼ばれたら部屋に入るよう言って帰っていく。

他に説明は何もない。

ざわめいたが、しかたなしに呼ばれるのを待つ。

すると俺の前に舟に乗っていたうちの1人が呼ばれ、部屋に入って行った。

知らない言葉だった。

もう一人が呼ばれた。

しかし、さっきの人は出てこない。

どうしたのだろう。

俺は怖くなった。

そして俺の番になった。

知らない数字を呼ばれた気がしたが、なんとなく自分の番号だと思えた。

ドアのノブに手をかけたが、この先にはなにがあるのか。

閻魔大王がいて最後の審判が行われているのだろうか。

部屋の中は普通の事務室のような部屋だった。

壁一面に書類棚があり、その中にはぎっしりとファイルが収められている。

窓の前に机があり、一人の男が座っている。

年はおそらく3、40代で特にこれといった特徴がない顔である。

なにやら書類を見ていて、俺は思わず就職活動の面接を思い出し、緊張してきた。

男はじろりとこっちを一瞥し、福引の箱のようなものを出した。

「じゃあ、引いて」

なにが『じゃあ』なのかさっぱりだが、質問できる雰囲気ではなかったので引いてみる。

取り出した紙に書かれている文字はやっぱり読めない。

無言で男に差し出す。

「はい、いいよ。目をつぶって、3・2・1・はい」

「ちょ……」

矢継ぎ早に指示を出してくるが、当然なにがなにやらさっぱりだ。いきなりカウントダウンをは始めたのであわてて質問しようとしたが間に合わない。

男が手をたたいた瞬間、目に衝撃が走った。

俺はあまりの激痛に声にならない叫びを上げて、しかし、体は動かずにた打ち回ることすら出来ない。

そして、俺の意識は飛んでいった。

ANOTHER SIDE

「あれ？」

いつものように転生者を送り出したら、何かが落ちた。

ここは冥界の第5転生課の22事務局。

といつても事務員は俺一人。

毎日訪れてくる転生者候補を異世界に送り出すのが俺の仕事だ。

誰をどこに送り出すのかは、既に決まっている。

俺のところに回ってくるのはたいていが橋にも棒にもかからないような連中で、神々の暇つぶしの駒として弄ばれる連中である。

送り出される世界は最近では娯楽小説の世界が多い。

ここ数年ブームらしい。

駒の数も最近では簡単に補充が利くためもうしばらくは続くだろう。あくまでも余興として行われているため、そのまま転生されたりはしない。

凡は何度転生しても凡である。

そんなやつ的人生が面白いわけがない。

だから何か力を付与するのが通例である。

最初は本人になにを付与するか選ばせていた。

しかしそれでは仕事がかどらないので、うちの局ではくじを引かせている。

おかげで仕事はだいぶ楽になった。

一人当たりの面接時間は1分弱。事後処理を加えても10分かない。

おかげで捗る捗る。

今回もいつものように仕事をしたのだが、何か失敗したか？

整理番号 A Z G - 1 3 5 4 7 9 8 番の立っていたところを見ると眼球が二つあった。

おそらく目をつぶれといったのに開けていたのだろう。

よくあることだ。

約束を守れない、助言を聞けない、義務を果たせない。
そんな人間がいる。

まあいい、どうでもいいことだ。

指をぱちんと鳴らし、掃除をして書類を片付ける。

そして次の人間を呼ぶ。

なんてことはない。

いつもと変わらない出来事だ。

ブログというより経緯の説明（後書き）

ここまで読んでくださった読者の皆様。

ありがとうございます。

新しく連載いたします本作、楽しんでいただけたら幸いに存じます。
ゼロの使い魔は原作よりも二次のほうが好きな作者です。

できるかぎり世界観を壊さず、しかし原作とは違うストーリーを
指したいと思います。

他の連載もがんばって続けます。

どちらも中途半端にならないようがんばりますので応援してください。

一寸先は闇

さて、前述したようにわけのわからないまま転生した。

気絶した後、ずっと長い間寝ていたようだ。

俺を目覚めさせたのは尻に激痛が走ったからだ。

産婆さんが叩いたのだろうが、当時の俺は知る由もない。思いのたけ叫んだ。

そして、目が見えないことに気づき、さらに叫び。

言葉が出ないことに気づいてさらに叫ぶ。

体も動かすことが出来ず、耳も遠い。

わけのわからないまま、体力が尽きるまで叫びつづけた。

そんな日々が何日か続いて、自分の状況を理解するまで数ヶ月かかった。

それまでは理性をなくし、本能のまま叫び、汚物をたらし、乳を飲み、惰眠を貪った。

相当手のかかる子供だったはずだが両親の負担は少ないだろう。なぜなら俺は貴族の生まれで貴族は子育てなんかしないからだ。

基本生まれてきた子供は乳母をはじめ、召使いが面倒を見る。

母親自ら世話をするのはそれらを雇えない者のすることだそう。

幸い家は裕福なうちだそうで、乳母が子守唄のように家のことを聞かせてくれた。

赤子が理解できないのは承知だろうが、情操教育は既に始まっているのだらう。

何度も何度も繰り返し聞かされている。

そのうち言葉が理解できるようになり、そして自分のことを思い出せるようになった。

乳母の話聞き、さまざまなのが理解できるようになった。
ここが自分のいた世界でないこと。

自分は伝統ある伯爵家の3男で、上に4人の兄姉がいること。
自分を世話しているのがマーサという名前の乳母であり、母親ではないこと、などなど。

その中で特によく出てくる単語が『始祖ブリミル様』。

そう、ゼロの使い魔に出てくる単語だ。

ここはハルケギニアのトリステイン王国の伯爵家なのである。ババ
ン！

それを理解したからといってどうということはない。

正直、原作はほとんど覚えていないんだから。

それに、生まれたばかりの自分に出来ることなんて何もない。

いや、成長しても何も出来ないだろう。

政治も経済もろくに勉強してこなかった。

新聞ですらろくに読んでない。

農業？工業？漁業？

なに、それ？

前世の知識なんて環境がまるで違うこの世界でどれほど通用するの
か。

パソコンもケータイもないこの世界で俺に出来ることは何だ？

だが、それ以上に問題なことがある。

目が見えないのである。

まぶたを開けているという意識はあるのに何も見えない。

視界には闇が続くのみ。

最初は赤子だからだと思った。

前世の記憶にも赤子の頃のはさすがにない。

こんなものだろうと思うようにした。

しかし、周りがそんな俺の様子に気づく。

そして医療に精通しているメイジが来て診察したところ、俺の視力は既に死んでいるともこと。

いろいろ秘薬を使ったが生まれつきの障害とあきらめられた。

原因はわかっている。

おそらくあの時だ。

転生する前のあの事務室で目を襲った衝撃。

あれはおそらく転生の儀式のようなものだったのだろう。

えらい簡素だったが。

それが何かトラブルを起こしてこんな結果になったに違いない。

あんないい加減な仕事をしていたのだ。

ミスが出るのも当然。

俺は生まれてすぐに自分の運命を呪った。

今はいい。

やさしい乳母がいて、俺の身の回りのことを全部してくれる。

だが成長したらどうだろう。

ハルケギニアにおいて目の障害がどのような扱いを受けるのか。

3男ということの後継はありえない。

俺に出来る仕事なんて存在するのだろうか。

いやそもそも将来性の薄そうな子供を育ててくれるのだろうか。

俺の未来は原作に関係なく、早くもデッドゾーンである。

一寸先は闇（後書き）

早くも生命の危機。

主人公に未来はあるのか？

続きます。

補足

主人公はあのクジは転生先を決めるものだとは理解していますが
実は特殊能力を決めるものでした。

さてなにをもらったのか。

既に決まっています、皆さん推理してみてください。

正解された方はヒロイン候補を指名できます。

ふるってご参加ください。

人という字は支えてくれる人がいないと倒れてしまっんです。

おはよう、みんな。

今日もいい天気だ。

きっといいことがあるに違いない。

俺はダルク・トマス・ド・ウィルズス。

ウィルズス伯爵家の3男である。

俺がハルケギニアに生まれて5年の歳月がたった。

俺はまだ生きている。

といっても俺が何か努力したわけではない。

これはひとえに乳母のマーサのおかげである。

俺は本当なら処分されるはずだった。

実際に親父殿が離れにやってきてそうだったのだ。

当家が寄付を出している孤児院に引き取らせるつもりだったらしい。

しかし、盲目のみで平民に落とされて生きていけるはずがない。

それをマーサが懇願してやめさせたのだ。

ハルケギニア史上、盲目でも偉大なメイジになった人がいなかったわけではない。

俺の処遇は保留となった。

マーサは俺の命の恩人だ。

家族の誰よりも俺はマーサを信頼しているし、マーサの言いつけは必ず守っている。

マーサの恩に報いるためにも、立派なメイジになろうと決意した。

そして5歳の誕生日。

俺は杖をプレゼントされ契約することになった。
手に持った感触からは木製の指揮棒の様だった。

家庭教師として雇われたメイジに習ったとおりに契約の呪文を唱え、
契約は無事完了した。

正直ほっとした。

これが出来ない又何も出来ない。

最悪、捨てられる危険性もあったのだ。

ハルケギニアは魔法が絶対。

魔法が使えなければ無能なのである。

杖の契約は初歩中の初歩。

ゼロのルイズですらできているのである。

少なくとも魔法の才能はゼロではないようだ。

そしてその夜はささやかな晩餐が開かれた。

本来は伯爵家の誕生日ならそれなりに盛大に祝うものだろうが、俺
はあまり公にしたいくない存在らしい。

世間では病弱だから表に出ていないことになっている。

才なしと判断された瞬間、病死したと公表されるのだろう。

晩餐の席でも勉強に励むよう強く言われた。

翌日から魔法の勉強が始まった。

本当の苦労はここから始まる。

呪文を唱えるが何も起こらない。

何度もやっているうち何かが起こるが、なにが起こったかわからない。
い。

失敗したようだ、なにが悪いのかわからない。

家庭教師の先生が何度も教えてくれるがうまくいかない。

イメージが大切だといわれるが、手本を見れていないのでイメージがつかめない。

先生も盲目の子を教えた経験はないようでもうどう教えたものか、頭を悩ませていることだろう。

何日も何日も試行錯誤するも、成功はしなかった。

俺は焦った。

俺は目が見えない代わりに、他の器官が発達し敏感になっていた。過敏といってもいい。

周りの雰囲気を経験質なくらい気にした。

いつ捨てられるかわからないプレッシャーの中で懸命に生きているのだ。

しかし一向に成果の見えない練習の成果に周りは両親はなにを想っているのだろう。

それが恐ろしかった。

焦って我武者羅に呪文を唱えて、それでもうまくいかず、先生に怒りをぶつけた。

思いつく限りの罵詈雑言を浴びせ、ついには先生が見放した。

一人絶望に泣いた俺を救ってくれたのはやはりマーサだった。

マーサは俺の全てを受け止めそして丁寧に丁寧に諭した。

マーサにもずいぶんひどいことを言った。

マーサは自分の保身のために世話をしているのだらうともいった。

このことを思い出すたび、俺は自分の未熟さを戒める。

俺の命はマーサに救われた。

だから俺の存在価値はマーサの評価にもつながる。

恩あるマーサのためにもここで終わるわけには行かない。

「ごめんなさい。」

家庭教師の先生に謝りに言った。

何度も頭を下げ、これからも教えてくれるようお願いした。
マーサはいない。

これは自分ひとりですべきだと思った。

これまでの人生、前世を含めてここまで真剣に謝ったことなどなかった。

恥ずかしさと申し訳なさで後悔でいっぱいになったことなどなかった。

「明日からはもっと厳しいですよ。」

先生の表情は見れないが、その声は慈愛に満ちていた。

先生も俺の将来を真剣に心配してくれていたのだらう。

今後、この先生の指導に従おうと誓った。

大事な人が増えました。

A N O T H E R S I D E

ゴクゴクゴクゴク

「ぶはっっ!! ウマイ!

やっぱ仕事終わりの一杯は最高だー!!」

今日も仕事を終え、馴染みの居酒屋で飲んでいる。

向かいの席には同期入社の人。

俺とは違って順調に出世したエリート様だがこうしてたまに酒を飲む仲間もある。

「最近、そっちの部署は忙しそうだけど、残業しなくてよかったのかい？」

は？

うちは残業しようがしまいが給料は一緒。
だったらしないほうが得だ。

「いいのいいの。」

それに俺の分はもう終わってるし。」

これは事実。

今日も何十人と転生予定者がいたが、時間以内に終わらせた。
さすが俺！

デキル男！

「ならいいけどね。」

最近、こっちの部署で妙なうわさが聞こえてね。」

噂ね。」

ゴシップ嫌いのこいつが話題に出すんだ、信憑性は高い。

「近々、社内の人事を再編するらしい。」

これは驚きだ。

「一番可能性の高いのは？」

半ばわかって聞いてみる。

そうでないことを祈って。

「決まってるだろ？」

そう、決まっている。

俺のいる部署だ。

これまでも何度も議題に出されてきた。

そもそも神々の娯楽のために作られた部署。

神々の気まぐれによって開かれ、気まぐれで閉ざされる。
苦勞するのは俺たち下の連中だ。

「まあいいけどね。」

どうせもともと閑職にいたんだ。」

「まだ時間はあるから、その間に再評価されれば。」

まあね。

だけど連中にとってはなくなったほうがいいんだろってけど。

人という字は支えてくれる人がいないと倒れてしまっんです。(後書き)

第3話投稿です。

会話が少ない。

次回から登場キャラも増え、会話が多くなると思います。

主人公の名前でました。

完全オリキャラです。

後々出しますが、ウィルズス家のモットーは体が資本。

故に体に障害を持つ子供には基本冷たいのです。

愛情がないわけではありません。

ただ、何十人と子供を作ってスパルタで鍛えぬき残った子を育てるのが基本方針です。

人道的かどうかはともかく。

仰げば尊し、わが師の恩。教えの庭にも早幾年。

おはよう、みんな。

今日もいい朝だ。

きつとすばらしい1日が待っている。

俺は12歳になった。

まだ生きている。

そして正式にウィルズス家の一員として認められた。

これもマーサと家庭教師のミーク先生のおかげだ。

現在は土のライン。

才能があるとはいいいきれないが優秀なほうだろう。

そしてミーク先生とのお別れがやってきた。

ミーク先生はよく指導してくださった。

本当に感謝している。

根気強く僕にぶつかってきてこの人に会えて本当によかったと思える。

最高の先生だ。

クビだとか、死別とかではなく、僕への指導が評価され、もっといい職場に紹介されたのだ。

先生もこれ以上僕に教えることはないといった。

これは永遠の別れじゃない。

遠くはなれた先生のいるとこまで僕の名前が聞こえるようなメイジになれ。

それが先生への恩返しになる。

そういつて先生は旅立った。

晴れてウィルズス家の一員となり改めて家内の情報を整理する。

ウィルズス家の歴史は古く、始祖ブリミルの時代までさかのぼれるらしい。

しかし、歴史書で一番古く家の名が出てくるのは約800年前。

ケーニス・ド・ウィルズスが内戦で陣頭に立つて奮戦したのを王に認められ領地を賜った。

それが現在の本宅のあるウィルズス領ウィルズス村。

ここは山間地で人口も少なかった。

何より戦場になっていたところで荒れ果てていた。

その事実を聞いたとき、本当に勲功が認められていたのか疑問に思う。

ケーニスはその戦で負傷し、領地で療養していたが軍人一筋で内政はさっぱりだったため引きこもっていたそうだ。

そのまま没落すると誰もが思ったその窮地を救ったのがその息子ジエローム・ド・ウィルズス。

彼は使い魔にジャイアントワーム（巨大ミミズ）を使い、その土地を繁栄させた。

具体的になにをしたのかは失伝しているが、ウィルズスではジャイアントワームを祀る社があり、

ウィルズス領内でジャイアントワームを捕獲することは禁じられている。

ジャイアントワームは、使い魔の餌としてよく捕獲される。

また、人間の食用としてもよく使われ、平民にとっては貴重な蛋白源でもあるらしい。

貴族の食卓には出ないが。

閑話休題

とにかくジェロームの力によりウィルズス領の穀物や野菜は良質と評判になり、ウィルズスブランドが出来た。

そしてジェロームの子、ホプキンスはジェロームの使い魔と契約を交わしたらしい。

それが土着信仰として今も残っている。

その結果、ジャイアントワームの恩恵はウィルズスだけでなく近隣にまで及び、ホプキンスは感謝される。

その功績と稼いだ金で近隣の土地を買いあさった。

これが現在のウィルズス領の基礎となる。

しかしこれが他の諸侯の反感を買い政争に巻き込まれるのだが余談である。

ウィルズス領の作物はトリスティンに利益をもたらしているが、それを他家に脅かされないよう閨閥によって守っている。

ホプキンスの孫、リチャードは子沢山である。

家計図には15人とあったが、幼く死んだものもいたためもったいのだろう。

ちなみに奥さんは9人だったらしい。

子供らは男は皆、宮廷へ行き中央から家を守り、女は他家へ嫁ぎ縁を強めた。

おかげで現在ではウィルズス家を脅かす家はほとんどいない。

田舎貴族が出世したものだ。

他国にも閨閥があるのだから恐れ入る。

だから基本、ウィルズス家は子沢山である。

たくさん子を産み、優秀なもののみ子とするという家訓がある。つまり、俺のもあくまでそれに従っただけということ。

現に俺の下に弟が2人、妹が3人いるがまだ認められていない。しかし2つ下のトープは時機に認められるだろう。

余談だが、わが父・ロイスは4人妻がいてわが母は第3夫人らしい。

そんな兄弟の多い我が家がどうやって次期当主を決めるのか。

それはジャイアントワームにある。

ジェロームの契約により栄えたわが領地。

次期当主はやはりジャイアントワームを使い魔として召喚しなければならぬ。

ジャイアントワームは土属性。

つまり俺にも次期当主の資格はあるということである。

そのせいかわからないが、最近、長兄・フリードリヒの見る目が怖い。

俺の使い魔の儀式は4年後。
どうなることやら。

仰げば尊し、わが師の恩。教えの庭にも早幾年。（後書き）

ああ、また会話がない。

読みにくくてすみません。

さて今回はダルクの家についての章でした。

ウィルズ家は経済的に豊かで閨閥も多いという設定。

今後はガリアよろしく兄弟の地で血を争う内容になるのかこつこ期待。

原作キャラ、まだ出ませんね。

ぼちぼち出てきます。

最初に出るのが誰かは予想してみてください。

新しい出会い。そして

やあ、こんにちは。

元気かい？

俺は元気だよ。

苦難になんて負けない。

応援してくれる人たちがいるのだから。

ごめん。

ちよつとキモかったな。

今、テンションがマジやばい。

原因は新しくきた家庭教師のスミス先生。

魔法学院入学までのんびりできるかと思えばそうは行かなかった。

スミス先生は元軍人の土のスクウェア。

うちのじいさんと親友らしく、うちの教育方針もよく知っているらしい。

つまり、超スパルタだ。

この人は俺だけのためにわざわざ親父殿が三顧の礼を尽くして連れてきたらしい。

有り難いが、正直くじけそう。

でもくじけない。

今の俺はとて前向きなのさ。

相変わらず目が見えず毎日不安と戦っているが、一人でないことを知っている。

信頼できる人がいることがここまで心強いとは思ひもしなかった。

それに努力の成果が出ていることも大きい。

長いトンネルを走り、いつまで続くかわからない闇の中を潜り抜けた瞬間、

その達成感と感動はこれまでのどんなことよりも気持ちよかった。

それを知っているから、このスパルタにも耐えられる、といいなあ。

ミーク先生から手紙が来た。

当然読めないので従者のヨハンに読んでもらう。

ヨハンはマーサの息子。

つまり俺とは乳兄弟だ。

どうやら無事、新任地に着いたらしい。

今度の教え子は6歳で、俺とは違い、素直でかわいい子だそうだ。

「はっはっはっは。」

先生は元気そうだね。」

先生が出てもうだいぶたつが、昨日のことのように思える。

手紙には先生らしい、とてもわかりにくいジョークが所々は言っている。

それが俺やヨハンには面白かった。

そして先生の指導をもっと受けたかったという思いが出てくる。

先生は厳しかったが、それ以上に愛情を感じた。

「しかし、残念ですね。」

学院入学までミーク先生が教えてくださるものとばかり思っていました。

先生の指導なら、坊ちゃんの魔法の才能をもまだ引き出していただけたはずです。

正直、今度の先生の指導には疑問を感じています。

スミス先生は格闘技ばかり教えておられます。

元軍人だったからかもしれないませんが、果たして坊ちゃんに必要なのでしょうか？」

俺の心を読んだかのような発言をするヨハン。
こいつにはときどきこういった発言が見られる。
不快ではない。

ただ、見透かされているようで恥ずかしい。

「さて、どうだろう。

ただ、父上にも考えがあつてのことだろう。

それにウィルズ家の男子は兵役が義務付けられている。

それを見越しての訓練だろう。」

正直、これがネックだ。

当家の男子は5年の兵役が義務付けられているが、盲目な俺が入隊を許可されるとは思えない。
兵役に代わるものを探そうと随分前からヨハンと話し合っていたのだ。

家督がほしいのではない。

ただ、他の兄弟に引け目を感じたくないだけだ。

スミス先生との格闘訓練は恐怖の一言である。

前世でもケンカの経験なんてなかった。

スミス先生に格闘訓練を始めるといわれ、顔面に拳をモロに受けた。
おそらくは右ストレート。

老人とは思えないタメと捻りの利いたパンチだった、とはヨハン談。
俺は鼻血を出し気絶した。

人間は衝撃受ける際、それに備えるよう自然と体が動く。
しかし、俺は目が見えないため、耐えることも逃がすことも出来ないのだそうだ。

先生は気配を読んで動くよういうが、できるはずがない。

「出来ぬなら、死ぬがよい」

そういつて攻撃呪文をぶつ放した先生を俺は本物の鬼だと思った。
前世で鬼のようだと思った人は実は天使だったことに気づいた。

新しい出会い。そして（後書き）

おかしいな。原作キャラを出すつもりが、次こそ出ます。

父からの試練

やあ、おはよう。

今日は雨が降っているね。

でも僕の心は澄み渡っている。

厚い雲も、僕の心の太陽は隠せないということさ

おえっ

申し訳ない。

今回は特にひどい。

仕方がない。

今はきざな台詞の勉強中なのだよ。

理由は俺の社交界デビューが待っているからさ。

12年間、病弱ということで表舞台に立たなかった俺が、

今回は首都トリスタニアのパーティーに出席する。

目的は確か父上の魔法学院時代の同窓会のよなものだったと思う。
大勢の人の前に出るのは初めてだ。

今回はマーサもヨハンもない。

そして何よりパーティー会場には杖を持っていけないということだ。

俺は魔法を覚えたことで生活がだいぶ楽になった。

歩くとき、何かを探すときに俺は魔法を使っている。

地面の振動から周りの状態を把握するセンサーのようなものだ。
これが使うために魔法の腕を上げたようなものだ。

逆に言えば、これがないと俺の生活は制限されてしまう。

それなのに、ああそれなのに。

なぜ父上が俺を連れて行こうとしているのか、おそらく俺が貴族の仕事を果たせるか確かめるためだろう。

貴族の仕事とは領民の幸せと安全を守ること。

しばらく前に、ミーク先生の質問の質問にこう答えた。

「それは大変いいことですね。」

しかし、それは重要ではないという。

「領民とは、多少不平不満があったほうがよく働くこともあるのです。」

では答えは何かと聞く。

「まず、貴族というのは身分であり、称号です。貴族社会に認められ、統領である王家から授かるものです。したがって、勝手に貴族位を名乗ることは偽証罪にあたります。貴族の仕事とは、その貴族社会を守り、調和を保つことといえます。」

一つは納税。王家にお金を納めることです。これは王家への忠誠を示すためであり、臣下としての義務です。そのための領地経営ですから、ダルク君の答えはここに当たりますね。この義務を果たすためにどの家も大勢の家臣がいます。

二つ目は戦争。王家が危機のときは貴族は王家を守らなくてははいけません。金銭で済ますところもありますが基本はそうです。また、貴族位を持たないものも兵役がかけられています。特に決まっています。ませんが、まあ最低3年ですね。当家では5年となっています。

三つ目は社交。他家との交流です。これをおろそかにすると貴族社会からはじかれてしまいます。」

特に三つ目の社交というのが大事ならしい。

「人は一人では生きていきません。スクウエアのメイジといえど、

一人でできることには限りがあります。そして人間関係の基本は心です。礼儀や作法も相手を不快にさせないようにするためのものですが、自分の人となり伝えるものでもあります。貴族の会話とは言葉だけでなく、そういった所作からも相手の心を得るのです。それが社交です。」

いろいろと教わったが、わかることは目が見えないということはそれだけで不利ということだ。

言葉以外のコミュニケーションはただでさえ難しい。

長年かかってようやく杖を使つての生活になれたのに。

一応、最低限のことはできるだろうが、これは父上からの試練だ。

魔法学院に入る前に、俺が貴族社会でやっていけるかをこの機会に審査するのだろう。

ならば、やらねばならない。

そんな決意は会場に来てすぐに霧散していく。

父上に紹介され多くの人と挨拶を交わすが、特に会話も弾まず離れていく。

ここにきて重大な欠点が見えてきた。

実は俺、人見知りするんだ。

生前から友人は少なかったが、ハルケギニアに来てまともに会話した人が片手で足りてしまう。

おまけに相手が見えないととても怖く思える。表情が見えないのもつらい。なにせ父上の友人は軍人が多く声も野太い。なんというか威圧感がある。相手に威圧する意思はないのだろうか。

一通り回ったのだろう。壁際のいすに連れられ、後は自由にしろといわれた。自由にというより休めといわれたようだ。遠慮なく座らせていただく。

こうして周りの喧騒から離れ、一人でいると久しく感じなかった孤独感を思い出す。

いや、忘れていただけで、今でも俺には見方は少ない。家督を継ぐのはほぼフリードリヒで決まりだろう。

土のトライアングルで後継の条件であるジャイアントワームも召喚した。

兵役を終え、既に父の仕事も手伝っている。なかなか優秀だという。もう一人の兄上は風属性。姉上達もジャイアントワームを召喚できなかったので資格がない。

その次の対抗馬といえば僕になるが、僕には貴族は無理だというのが今回よくわかった。

いや、僕にわからせるために父上は連れてきたのだろう。

ああ、暗い。

また長いトンネルに入ったようだ。

父からの試練（後書き）

社交界なんて詳しく知りませんが、セレブは毎日何かのパーティーがあるのでしょうか。

今回は主人公の遅くなった社交でデビュー！。

もちろんパーティーの主役は彼ではありませんが。

パーティーはまだ続きます。

原作キャラがついにです。

予想できますでしょうか？

次回こうご期待。

パーティーは続く。場所を変えて。

ハロー、ダルクです。

今、舞踏会にいます。

しかし、前回の同窓会ではない。

ラ・ヴァリエール公爵家の主催の舞踏会である。

場所はラ・ヴァリエール領の屋敷。

パーティーのほとんどはトリスタニアで行われる。どの貴族もトリスタニアに屋敷を構えており、集まりやすいからだ。また、自領でやる場合、招待客の対応もかなり負担になる。それもまた理由の一つだ。

しかしラ・ヴァリエール公爵はトリスタニアの舞踏会にあまり出てこない。前回も招待されていたということだが来なかった。理由は病弱な娘さんがいるかららしい。自領からあまり出てこないのだそう。それでも貴族としての義務を果たすべく自領で定期的にパーティーを開いている。

さて、俺がなぜここにいいのか。もちろん招待されたからだ。俺ではなくウィルズ家が。どうやら父上と同期らしい。前回の失敗をいつまでも引きずってられない。リベンジを果たしにきたのだ、が、
・
・

「やあ、ダルク。またこんな隅にいるのかい？」

そう、もしかして俺はみんなの輪の中に入れていない。

「ジャン・ジャック。それは嫌味か？」

俺に声をかけてきたのはジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。ラ・ヴァリエール領の近くのワルド子爵領の次期当主だ。前回のパーティーで唯一声をかけてきてくれた男だ。近い年の子供があ

まりいなかったからだろう。まあ、軽口をたたける程度の仲だ。

「君も踊ってきなよ。練習したんだろ？」

「ふん、相手がいればな。みんなに断られたよ。足を踏む殿方とは踊れませんってさ。」

猛特訓によつてダンスを踊れるようにはなつたが、盲人とパートナーになる人間がそもそもいないのではどうしようもない。

「カトレア嬢は？彼女は心優しいこだ。きっと踊ってくれる。」

ジャンはラ・ヴァリエール家と親交が深いらしく、結構詳しい。

「ダメだったよ。彼女の姉妹が出てきて追い払われた。」
まったく、俺は害虫かつての。

「ああ……それは……お気の毒に。」

ジャンの口が重くなつた。なるほど彼も彼女の被害者か。

カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。公爵の娘で、ジャンの言う通り、心優しい少女だ。声で判る。しかし病弱なためあまり外には出てこない。それを残念に思う男性はきつと多いのだろう。

そしてその姉、エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。彼女については『苛烈』の一言だ。なにせカトレア嬢をダンスに誘つたら彼女が出てきて俺に罵詈雑言をたたきつけて彼女を連れて去つていったのだから。台風のような人だ。正直もう関わりたくない。

この二人が同じ両親から生まれたなんて信じられない。遺伝子の不思議だ。

「そういうジャンは踊らないのか？」

「踊ってきたよ。……そのエレオノール嬢と。」

合唱。

「いや、彼女は悪い人ではないんだよ。ただ、家族のことになると

感情が昂ぶって……」

ジャンが必死にフォローする。

こいつも大変だなあ、ご近所づきあいが。

ジャンだけでない。

おそらくここにいるほとんどの貴族がヴァリエール派といわれる人間だろう。

歴史と伝統を重んじるトリステインの公爵様だ。その影響力は大きい。

しかし、最近の引きこもりのせいか反ヴァリエール派のような勢力ができてつつある。言ってしまうえばラ・ヴァリエール公爵は落ち目である。よってくるのは恩を売って甘い蜜を吸おうとする連中ばかり。ま、ジャンには悪いが……

今日参加している中で例外はうちと

「彼女は今はゾイドと踊ってるよ。」

……いやな名前を聞いた。

ゾイド。ゾイド・ブラックシエル・ド・グラモン。軍の名門・グラモン家の長男だ。

「さすがゾイドだ。彼女と踊ろうなんて。そこにしびれもあこがれもない。彼の人となりは好きじゃないが、その勇氣には賞賛を送ろう。」

「勇氣って、言いすぎだよ。まあ、さすがのゾイドも苦勞してるよ。なにせ誘うだけでもだいぶ時間がかかってたからね。」

「俺ならそもそも誘いもしないよ。」

「まあ、彼もグラモンだからね。」

グラモン伯爵家。軍の名門として有名だ。代々軍の中枢に多くの人材を送り出している。当代のグラモン伯爵はすでに大将の階級を得ていて、次期元帥はほぼ間違いないといわれている。しかし、それと同じく有名なのが女癖の悪さだ。ゴシップのネタにはことを欠かないといわれる。

これは遺伝的なもののようで代々多くの女性を娶っている。そうすると当然子供も多くなるので競争が激しい。結果、優秀な人材が多く排出されているということ。ここまではうちと変わらないが、この家は戦う以外に興味がない。領地経営は代理人をたてて自分はトリスタニアに滞在している。一応黒字だそうだがその利益は私兵の軍備に使われて金銭的には裕福ではないそうだ。

うちの父上、ワルド子爵、グラモン伯爵、ラ・ヴァリエール公爵は魔法学院でも軍でも同期だったようでジャンとゾイドの交友も結構長い。

ちなみに確認しておくが、トリステインは重婚は認められている。うちもそうだし。そして浮気という概念はない、はずだ。誰と何人でも恋愛しても自由。かつては当たり前だった。それがそうでなくなったのには理由があつて、その原因は王家にある。

現在の国王がアルビオン国王の弟であり、トリステイン王家の血はマリアンヌ王妃が引き継いでいることは知っているだろう。実はその前もその前も、もう5代くらい女性が王家を継いでいる。いうなれば近年のトリステインは女系なのだ。さらにトリステインの貴族らしく気位が高い。つまり側室は認められない。

王様が側室を持っていないのに家臣である貴族が持つのは気まずい、という雰囲気が出来上がり、妻がいるのに他の女性に手を出すのは不貞という文化ができてきたのだ。最近議会で1夫1妻制が議会に出るほどに。棄却されたが。王様の決済で。

季節は秋。冬になればしばらく領地から出ることはないだろう。一年間、いろいろあったが、重要な課題が残ってしまった。

ぺ
っ
た
ん

ぺ
っ
た
ん

ぺ
っ
た
ん

a
n
o
t
h
e
r

s
i
d
e

俺は今、黙々とハンコを押している。
横にはこの書類を持ってきた女が「早く帰らせろ」とにらみつけている。

だったらこんなにも持つてくるなと言いたい。
因みに書類にはこう書かれている。

『管理世界の局地的災害発生許可』
意味がわかるだろうか？

この女が所属しているのは観測部環境変動影響観測課。

ますます判りにくいな。

早い話、地震や火山の噴火などを大規模で発生させ、その後の世界を観測するのが仕事だ。観測に使われる世界はいろいろあるが、うちで管理している世界が多い。理由は生体実験にねずみが使われるのと一緒に。

この書類はその許可書ね。
ああめんど。

正直拒否したいが（実際に拒否するヤツも多い。実験に使われた世界は滅びることが多いから。今まで育てて愛着があるのだとかで）、この書類を書けば管理世界の管轄があっちに移るのだ。仕事を押し付けるためならハンコぐらい押してやるさ。

「はいよ、これで終わり。」

「ありがとうございます。観測した結果はこちらにも送らせていただきますので。」

べつにいらねえよ。

手をひらひらと振り送り出す。

さて、今日は転生させるヤツももついなえし、ゲームでもするか。

机の上にはさっきの書類の控えが置いてある。
その一つにはこうかかれていた。『内乱勃発』

パーティーは続く。場所を変えて。（後書き）

7話投稿です。

初の登場原作キャラはワルド様でした。

ワルドとは同じ年です。ということはあのキャラは？
ルイズ達とどうからむのか、こっご期待。

ちなみに盲目のダルクが踊りを踊れる件について、これはチートでなく努力です。

次話でもその様子を書くつもりなのでご理解ください。
ご愛読ありがとうございます。

冬が始まるよ」

ハロー、ダルケツす。

みなさん風邪をひいてませんか？

インフルエンザ対策はしてますか？

ハルケギニアではインフルエンザのワクチンなんて存在しません。

金持ちの特注の秘薬で治すこともありますが、基本は自宅療養。

貧乏人は死を待つのみ。

厳しいね。

ハルケギニアの平民の平均年収が約100エキューという話を生前聞いた気がする。原作知識はほとんど覚えてないが。

しかし、それは間違いである。おそらくそれはトリスタニアなどの大都市での平均だろう。まず平民の使う貨幣のほとんどはスウ銅貨にドニエ銀貨。エキュー金貨なんてトリスタニアに店を構えるような商人くらいである。

まあ、貴族が銅貨や銀貨を使うことはほとんどないから貴族を相手にすればそれだけで大商人の仲間入りといえる。

例えばリング。貴族が買うのは質のいい物を厳選して1個50ドニエ。町の表通りで売られているのは90スウ。しかし、一番売れているのは10個で7スウである。これは形が悪かったり小さかったり、虫食いがひどかったり、そんな日本であればゴミのようなリングである。基本、ハルケギニアにゴミはない。ゴミを出すほど豊かでない、というわけでなくものを大切にするのだ。この7スウのリングにしても食べるのはほとんど農民である。彼らにしてみればこんなうまいものをなぜ捨てる、となる。実際上手く使って料理している。

話を戻すとハルケギニアの平民の大多数が農民であり、彼らの年収

は多くない。税金は作物で収めているし、1年間の食事は自分の家で取れたものを食べるのでかからない。服や家などは村のみんなが総出で協力して作る。本当に金がかからないのである。一部の豪農が商人に売るための作物を作るが本当にごく一部。まあ、うちの領地には何人も居るけどね。

そんなわけで彼らは病気になるば医者にかかる金もないということ。それどころか病気が村に広がらないように殺すというところもある。殺して燃やして村を守るのである。一人の病気は村全体の問題となるわけです。

こんなに貧しい生活を送っているのだから、口減らしに子供を売る家もある。買うのは奴隷商、ではなく豪農。なにせ人がいくら居ても足りないのだ。そもそも普通の農民は奴隷商と連絡なんてつかない。ごくまれに奴隷商が人買いにまわっていることもあるそうだが、そんな商人は捕まる。奴隷は犯罪なのだ、一応。農豪にしても奴隷ではなく親から預かり見習いという形で働かせている。奴隷商にしてもそうだ。あくまでも雇っているのである、前金で給金を払ったという形で。

さて、長々とハルケギニアの平民について語ったが、冬というのは彼らにとってどのような季節だろうか。

ハルケギニアにも季節はある。春、夏、秋、冬、そして虚無の季節。虚無の季節は昼の時間がほとんどない。だから1日の感覚がなくなってしまうので虚無の季節には誰も仕事をしない。虚無がなければ春の訪れである。

さて、そうなると冬は虚無の準備期間ということになるが、しかし、冬に作れる作物なんてない。だから来年の春の準備をする。衣服を作り、道具の手入れをする。村人全員が集まり、来年の話をするの

も大切なことだ。虚無がなければ新年祭を開き1年間の五穀豊穡を祈る。これがハルケギニアのお正月。

春に種をまき、夏に育て、秋に収穫。そして冬に来年の準備をして虚無に備える。これがうちの平民の生活である。

さて、本題に入ろう。

貴族の冬は忙しい。なにせ虚無になれば仕事にならない。貴族は魔法によって作業ができるが使用人は魔法が使えないものの方が多い。自分の手間を増やしてまで仕事はしたくない。ゆえに休む。だから1年の仕事は冬の間に片付けるのである。

仕事を持っていない僕ら子供はというと、まあ暇である。僕以外は。

「やめ！坊ちゃん、そのステップ間違っていますよ。何度入ったらわかるんです？」

俺が今なにをしているかわかるだろう。わかるよね。来年からは今以上に社交場へ出ることになる。いつまでも壁の花を気取ってられない。俺の状態で平民はマジ死ぬ。なんとしても貴族社会に適合しなくては。

相手を務めるのはヨハン。まだ俺には女性を相手にするのは早いということか。周りにはメイドたちが踊っている。メイドが踊れるのかは知らないが、大事なのは俺が大勢の中で他人とぶつからずパートナーの足を踏まず、華麗に優雅に踊ること。しかし大勢の女性の中で俺だけが男と踊っているというのはなんと拷問だろうか。このときばかりは目が見えてなくてよかった。しかし、目が見えていればこんな苦労はなかったのに。ままならないものだ。

魔法が使えない以上、他の方法で踊れるようになるしかない。スパルタのみMr・スミスの猛特訓である。

「あなたは元々目が見えないのですから、虚無の季節は関係ありませんね。虚無の季節中もダンスのレッスンです。」
うへええええ。

冬が始まるよ♪（後書き）

ダルクの話、短っ！

というわけで第8話です。

虚無の季節はオリジナル設定です。

1年が地球より多いならもう一つ季節があるかもという考えから。
いろいろと辻褄が合わなくなりそうですががんばります。

春のうららのトリステイン

春である。

春といえば出会い、別れ、旅立ち。

いろいろな言葉が思い浮かぶが、俺にとっては関係のない話である。春といっても暦上の話である。虚無が明けたら春となっているだけで実際はまだ領地は雪に閉ざされている。うちは豪雪地帯なのさ。

Mr・スミスのおかげでダンスはだいぶましになった。

近くに人やものが来れば大体の気配がわかるようになった。すごくね？

おかげで前からやっていた格闘訓練もなんとか形になってきた。

俺ももう15歳。今年は魔法学院に入学する季節。何とか間に合った。

これであの糞餓鬼にはなめられることはないだろう。

今は新しい特訓中である。

Mr・スミスが俺に鎧のついていない矢を飛ばし、それをかわすという特訓。もちろん魔法なしで。鎧がないだけましだろ、とはMr・の言。やってみると次第にできるようになってきた。弦の音でタイミングがつかみやすいこともある。

「へいゝがんばってるじゃないか。」

この声は2番目の兄貴、ロイド。

「もう学院に戻ったのかと思ったよ。」

「なに、卒業後の進路について父上と相談していたのさ。」

進路？我が家では学院卒業後は軍に入るのが通例のはず。フリードリヒも兵役を終えてから帰ってきたんだ。

「兄上は軍に入らないのですか？」

「ふっ、まあいずれはな。しかしどこかの家に婿養子入りしたらそうも言ってられまい。」

なるほど、最近の兄貴の婚活はそれが目的か。

実は兄上と違い、兄貴の評判はあまりよくない。魔法については優秀だそうだが自分が汚れることを嫌い、汗や泥を嫌っていて、領民を見下す傾向にあるらしい。まあ、彼は風属性だし、使い魔も鳥だったらしいから家督の権利は無い。しかし非嫡子は兵役を経てから宮廷に勤めるのが決まりだが、恐らくそれが嫌で父上に交渉したのだろう。なにせ娘は軍入りしなくていいのだ。それは嫁ぐことがウィルズ家の利益になるからであり、つまり男でも他家に縁を作れるのであれば当家の義務を果たすことになるという考え方だ。

「では、相手は決まったのですか？」

「いや、だがいずれ紹介できるだろう。当家にとってこれ以上に無い相手だよ。」

・・・まさか王族とか言わないよな？

前にも話したがウィルズ家はそこそこに名門だ。

歴史と伝統を重要視しているこのトリステインでうちを悪く言える家が無い程度には。しかし、ただ一つ弱みがあるとすれば王家の血である。元々が下級貴族であり始祖の血は薄かったため伯爵家となった今でも王族との婚姻が結ばれることは無い。もしそれがなかったらこれ以上ない功績である。

「ふふっ、まあいずれわかる。」

なんだろう？あの自信。いくら当家でも王族との婚姻は不可能だ。こと婚姻に関して王族の条件ほど厳しいものは無い。そこにはメンデル遺伝子学が関わってくるためだ。

メンデルという名前に聞き覚えはあるだろうか？

地球において豆を使った実験で遺伝の法則を実証した人だ。

ハルケギニアにも同じ名前の人がいて、同じように豆を使って遺伝子の存在を

提唱しその法則をアカデミーに発表した。そして彼はこう続けた。魔法をつか

さどる因子、遺伝子が存在するにちがいない。

今でこそ珍しい話ではないが、当時は多くの関心が寄せられたそう

だ。もちろん豆云々は同でもよく、魔法の遺伝についてである。

それまでは、始祖の血が濃ければ濃いほど優秀なメイジが生まれるという考え

が主だった。つまり王家、王族、公爵と王家から離れれば離れるほど格が落ち

る。今もその流れは残っているが当時は貴族間の格差がひどかったらしい。

だがメンデルは次の実験によって魔法の遺伝子を説明した。

魔法を使える因子をA、使えない因子をaとする。

純粋なメイジ、たとえば王族などはAAであり純粋な平民はaa。

そして純粋なメイジと純粋な平民を両親に持つ子供はAaとなって

しまう。

問題はその子が魔法を使うことができるかということだ。

メンデルはメイジと平民の間にできた子を探し回って20人の男女を探し当て、調べた結果魔法の才能は無かった。すなわちAの因子を持つていてもaの因子を持つと魔法は使えない。

だが、この20人の間に子供を作らせたところ約25%の確立で魔法が使えたらしい。すなわち両親がともにAaだとしたらその子供はAA:Aa:a a=1:2:1となり25%の確立でAAが生まれるのだと。

この発表は世界に波紋を呼んだが、メンデルは異端審問にかけられ処刑された。罪状は人をモルモットとして使用したこと。彼の論文も消されたが、この論文からメンデル遺伝子学という学問ができ魔法の因子は調べ続けられた。その目的は優秀なメイジはどうやって生まれるのかであり既に絶えてしまった虚無の系統の復活である。そしてその専門家から結婚コンサルタントなる商売までできてしまった。

話を戻すと、平民の血が混じるといことは魔法の喪失につながるので嫌われている。そして魔法が使えない子が生まれるということは平民の血が混じっていることの証明であり、家を揺るがす不名誉である。だから魔法が使えないことでルイズやジョセフの扱いがひどいのは当然といえる。

特にジョセフは皇太子。もっとも始祖の血が濃いと思われていた一族である。

ある意味ジョセフの存在は王家の存在意義をもゆるがせていた。

長くなったが、下級貴族出身のうちが王家に婿入りなんて本人同士がよくても周りが許すはず無いぞということ。それとも学院内にいい子がいたのだろうか？

俺も学院に行ったら彼女がほしい。

春のうららのトリスティン（後書き）

メンデル遺伝子学はオリ設定です。

魔法の遺伝子は劣勢に違いないと。
でないとはルケギニア中メイジだらけでしょう？

一年生になった〜ら♪

あれやこれやで魔法学院の入学式である。

その間、いろいろあった、ということもない。

1．父上と呼ばれる。

「入学したらどうたらこうたら

栄光あるわが一族の云々

学院ではあっちよんぶりけ！」

正直何も覚えていない。

2．Mr．スミスに挨拶をしに行った。

「私の役目もこれで終わりました。

後はご自分で研鑽を積んでくださいませ。」

正直、鬼のような教師だったが、やはり別れの時となると感慨深いものがある。

「貴方には戦闘の才能はありません。

目が見えないというハンデがあるのもありますが、根本的に才能がありません。

貴方はいずれ軍属になられるのでしょうか？

そこでは誰も助けてくれません。

立ち止まっても周りは振り向くことすらしないでしょう。

貴方が自分で自分を鼓舞し、一人闘っていくことになるのです。くれぐらも（以下省略）」

年寄りの挨拶は説教臭くていかんな。
しかも長い。

あくびをこらえるので精一杯だった。

3・ジャンから手紙が来た。

あいつも学院に来るらしい。よろしくとの事。

こちらこそ、と返事を書く。

そんなわけで学院入り。

入学式まではまだ日があるのであてがわれた部屋のご近所さんに挨拶をする。

まずは左隣のご近所さん。

留守かな？まだ来ていない可能性もなる。

また今度にしよう。

次は右隣のご近所さん。

ノックに返事が来た。ん？この声は・・・

「やあ、誰かと思えばミスタ・ウィルズスじゃないか。

君も今年からなのかい？

大変だと思うが、がんばりたまえ。はっはっはっはっはっは。

ああ、わざわざ挨拶に来てくれたわけか。

ありがとう。近所のよしみだ困ったことがあれば助けてやろうとも。

このゾイド・ブラックシエル・ド・グラモンがな。

はっはっはっはっは。」

一方的に話して勝手に部屋に戻っていった。

ゾイドとの出会いは昨年のパーティーだが、第一印象は最悪だった。尊大で傲慢で常に自分を上位に置く言動が気に食わなかった。

才能にあふれ、自信と誇りをまとったような振る舞いが、俺の劣等感を刺激した。

初めて交わした言葉が

「やあ、君がウィルズス伯爵の三男のダルク君かい？」

目が見えないというのは本当のようだね。

それはとても残念だ。

僕という美しくも気高い薔薇を一目見ることもかなわないのだから。

そもそも（以下省略）
である。

落ち込んでいたときだったのもあり、かなりイラついた。

こいつの鼻を明かしてやることが目標だ。

こいつは父親であるグラモン伯爵の後継となるべく軍人になる。

それでも俺達は同期となるあろう。
絶っつっつっつ対に負けない。

一年生になった♪（後書き）

いよいよ入学。

ここまで読んでいただけたらわかるとおり、

ダルクの戦闘能力は低いです。

魔法は感知に特化しており、格闘訓練もようやく人並み。

剣や槍はまだ振ったことはありません。

スミスもそこまで教える気は無かったようです。

さて、そんなダルクは軍人になれるのか。

これからの学院生活にこうご期待。

ダンスパートナー

入学式はつつがなく終わったら次は舞踏会である。

この入学シーズンに学院では大きなものだけで3つの舞踏会が開かれる。

スレイプニルの舞踏会。フリッグの舞踏会。上級生主催の新入生歓迎舞踏会。

この舞踏会でどう立ち回るかで今後の学院生活が決まるといっても過言ではない。

人間、第一印象は大事だ。

俺が盲目であることは知っている人は知っている。

だが、知らない人もこの学院には大勢いる。

自分が踊れることをここでアピールしなくてはならない。

最近ダンスばかりだが、ここで貴族の価値観について話しておく。ダンスも含めて社交の場というのは自分の教養を示す場である。たとえば日本では食事で人間性がわかるといわれるが、ハルケギニアの貴族では舞踏会がそれにあたる。

それは軍人であっても同じ。ダンスの一つもできない無教養な人間に1軍を率いることはできないとされている。多くの人を率いるには力だけでなく情報をまとめ正確な判断を下すだけの知識や教養が必要である。そして一つのことだけに専念すればサルでも芸ができる。多岐にわたり秀でてこそ優れた将とされている。要はどれだけ戦争がうまくても常識の無いやつは使い捨ての鉄砲玉にしか使えないのだ。

まあそんなわけでダンスは女だけでなく、男にとっても大切な教養だということである。

まあ、ダンスだけで出世した軍人の話なんて聞いたことは無いが。

「そんなわけで、俺はなんとしてもダンスに誘わなくてはならんだ。」

「まあ、気持ちわかるよ。」

俺は今、ジャックと作戦会議中だ。

スレイプニルの舞踏会が間近に迫っているのにまだ誰も誘えていない。正直、コミュニケーションスキルに乏しい俺が女子に声をかけることは難度が高すぎる。ここは入学して間もないにもかかわらず何人かの女子から誘いが来ているジャンに助けてもらうしかない。「まあ、僕を誘ってくれた子に紹介してあげるよ。ただ、彼女達も僕としか踊らないわけ

じゃないからね。他の男達にも声をかけているだろうし。」

「それだけでも助かる。きっかけを掴むだけでも大変なんだ。」

よし、これでパートナーの目処がついた。

学院生活でこれ以上あいつになめられないようビシッとキメてやる。

予定だったんだが・・・

なんだこりゃ？

「おい、ジャン。俺の気のせいじゃなけりゃいいんだが、舞踏会なのに踊っているのが1

組しかいないようだが？」

「奇遇だね、僕も同じ事を考えていたよ。」

気のせいじゃなかったのか・・・しかし

「空いているならちょうどいい、パートナーを見つけて踊ろう。ジャン早速で悪いが女の子を紹介してくれ。」

がつついていっているようでみつともないが勢いが大事だ。きつと相手もきつかけを待っているのだろう。

「・・・無理だと思うよ？」

？

どうということだろう？

「やあ、ジャン。君もあぶれたのかい？」

！！

この声はゾイド！

何しに来やがった？

「やあ、ゾイド。『君も』ということは君もパートナーを取られたのか？」

「取られたわけじゃないさ。蝶は花から花へ飛び移ろうもの。今日はあちらの花が最盛期なのだろう。」

話が見えない。

「どうということだ？」

「ああ、君には見えていないのだったな。いや見えなくて幸いかな？なにせ一人の男が女性達を独り占めしているのだから。」

なんだと？

「いったい誰が？」

「さあ？ゲルマニアの男爵家としか知らないよ。」

「ゲルマニア？」

おかしいじゃないか？

トリステインではゲルマニア貴族は嫌われている。

そんなヤツがトリステイン女を独占しているだと？

「君は目が見えなくて本当に幸いだよ。見た目だけなら確かに僕に匹敵する美貌だ。」

げ？ゾイドが他人の容姿を褒めるだと？これは相当な色男らしい。「容姿だけじゃないよ。噂だけど、魔法の才能も相当らしい。」

ジャンの話では俺達と同年ながら複数系統のスクウェアらしい。それが本当なら才色兼備のスーパースターだ。俺達の学年の1番の注目株ということになる。

しかし

「だからといってなぜ他に誰も踊らないのさ？」

「もちろん彼の次のパートナーを勝ち取るためさ。僕らのパートナーも彼の順番待ちに加わったよ。」

「他の男と踊ってパートナーになりそこなわないようにってさ。」
世知辛い世の中だ。

「どこかでジャンはよく知っていたな？」

「まあ、うちもゲルマニアに近いからね。情報くらいは集めるさ。」

そんなあぶれた男同士が集まる1画に歩み寄ってくる気配が。

「ジャン、私と踊ってくださいませんか？」

ああ、この声は聞き覚えがある。

「これはミス・ヴァリエール。私でよろしいのでしょうか？」

「気持ち悪いわね。いつものように呼びなさいよ。」

「ではエレオノールさん。貴女はあの中に加わらなくてよいのですか？」

「冗談じゃないわ。私があんな田舎貴族と踊るだなんて虫唾が走るわ。」

本当に嫌そうだ。なぜこんなにも嫌うんだろう？

「なるほど、では私とも踊っていただけませんか、ミス・ヴァリエール？」

すかさずアピールするゾイド。こいつ、本当に怖いもの知らずだな。

「あら、貴方はグラモン家の？いいわ、後ほどね。その貴方もどう？」

俺もかよ？つてか、覚えてやがらねえし。

ああ、かつての恐怖がよみがえる。

「あら？あなた、どこかで・・・」

「彼はウィルズス伯爵の三男のダルクです。前に舞踏会でお会いしたことがあると思いますよ。」

ジャンが俺を紹介してくれる。

「ああ、貴方が。貴方からもロイドに言ってくださらない？私、彼とお付き合いする気はまったくありませんの。」

なるほど、あのバカ兄貴は恐れ多くも彼女を口説いていたのか。

しかし全く脈はなさそうだな。あの自信はどこから来ているのだろうか？

その後、エレオノール嬢と踊ったが、その後は誰に声をかけても上手くいかず、エレオノール嬢と踊ったことも誰も見ていなかったの
で俺の学院デビューは不発に終わった。

「・・・で？その後はどうなのだ？」

今、俺は会議室でミーティング中である。

今回の議題は最近の管理世界が神々から全く評価されていないためその対策である。

まあ、上司が俺達に責任を押し付けようとしているとしか思えんが。

「君は以前、会議中にこういったな。『一人の人間が世界に及ぼす影響は小さいため、一つの世界に複数の人間を転生させたほうがより世界が活発になる』と。しかし君のその後の管理世界はどれも凡庸と私のデスクにも報告が上ってこない。これはどういうことだ？」

それはそうだ。クズは何人集まってもクズ。何人送り出そうともせつかく与えた力を生かすこともできずに一生を終える。みんな使いこなせば世界を掌握できる能力ばかりなのに。まあ、わかってたことだけだね。因みに報告書は全て読まずにシュレッダーへ。だつて、面白くないのがわかりきってるし。

「善処します。」

「ふん、そんな言葉は聞き飽きた。口だけでなく結果を出せ！次つ！！」

やっと終わった。毎回同じ今年か言わないでボキヤ貧め。

どうせいつか潰れる部署なんだ。誰がまじめにやれるかっての。さうて、今日も飲みに行くか。

あの店のサヤカちゃん、今日はいるか？

ダンスパートナー（後書き）

行っておきますが、これは主人公最強ものではありません。

努力・友情があっても勝利はありません。

また、オリキャラが多数出てきます。

中にはチートとしか思えない人もいますが最強は存在しませんので悪しからず。

では次回はいよいよ学院生活が始まります。

決闘・トリステイン魔法学院

最近、学院内でよくないうわさが流れている。
しかもその渦中にいるのがジャンだ。

何でもジャンは王族に思うことがあり、いずれ国を裏切るだろうというもの。

馬鹿馬鹿しいにもほどがある。ジャンとの付き合いは短い、彼が優秀な男であることはよく知っている。反意なんてあるわけが無い。

しかし、現実としてこの噂が学院全体に流れていることは問題だ。事実の真偽に関係なく、これが生徒の親元に届けばワルド子爵の立場が危うい。俺は噂の発信源を探しついにあのゲルマニア貴族であることを突き止めた。決闘は御法度だし、俺程度が勝てるとは思っていないが文句の一つも言わずにはいられない。

「諸君、決闘だ。」

探していた人物をようやく見つけたと思ったなら先約がいた。この声はゾイドだ。

相変わらず気障ったらしい向上を述べて決闘を演出している。が、その口調とは裏腹に全身からすさまじい熱意を感じる。女を取られて逆上した、とギヤラリーは話しているがそうではないことを俺は知っている。あいつも友人を侮辱されたことを怒っているのだ。

「グラモン伯爵家が三男、ゾイド・ブラックシエル。薔薇の名の下に参る！」

ゾイドが薔薇の杖を出して名乗りを上げる。

「ゲルマニア・ヴァインベルグ男爵家長男、ヘルガ。全力で来い。」
ゲルマニア人、ヘルガというらしい、が長剣を抜いた。

貴族が剣を使うことは珍しい。

魔法第一で剣は学ばない、ということではなく、ただ杖と違って剣は消耗品なのだ。

杖との契約は簡単であり、複数の杖を持つことも一般的ではあるが、剣は斬り合う度に刃は欠け、曲がり、折れる。使えば使うほど手になじんで、魔力効率も上がる杖に比べて使い捨てともいえる剣との契約は効率が悪いというのが一般論。

ゾイドは土のライン。比べてヘルガはスクウェア。

結果は誰もがヘルガの圧勝と予想していた。

ゾイドを応援しているやつらもヘルガに対しての嫉妬で勝てるなんて思ってもいないのだろう。

俺も土のラインだが、戦闘面においてゾイドとは大きな隔たりがある。あいつで勝てないなら俺がかなうわけも無い。

ヘルガが巨大なゴーレムを出した。ゾイドの系統にあわせて戦意を削ぐつもりだろうか。しかし、真正面から戦うほどゾイドもバカじゃない。土煙を上げて視界をさえぎり、さらに詠唱を重ねる。

唱えたには鍊金。地面をぬかるませてゴーレムの動きを封じるつもりだ。

その後も立て続けに攻撃魔法を繰り出し一気に勝負を決めにかかるゾイド。立て直されたらスペックが劣るゾイドに勝ち目は無い。しかし、現状でも有効打はない。精神力とて無限ではないいつかやむ恐らくヘルガは攻撃のやんだ瞬間反撃に転じるだろう。ゾイドとてそれはわかってる。そして焦ってより攻撃が単調になってきた。まずい。

わずかな隙を見逃さずヘルガのゴーレムが腕を大きく振り、地面の土をすくい投げる。

巨大なゴーレムの投げた土は、柔らかいとはいえその大きさからかなりの質量になると予想される。直撃すればただですまない。

ゾイドはかわしたが、その隙にヘルガが迫る。接近戦では呪文を詠唱している暇は無い。

得物も薔薇の杖と剣では差がありすぎる。誰もがここで終わりだと思っただ。

しかし、ゾイドは待っていたとばかりに既に唱えていた魔法を開放した。

ただの石つぶてだが、カウンターで食らえば気絶させることぐらいはできる。

単調な攻撃もこの伏線だったのだ。

だが、ヘルガはそれを全て捌き、そのままゾイドの杖をきる。決着はついた。

ヘルガの圧勝である。ゾイドの攻撃は全て無効化され、ヘルガは一本太刀の元に捻じ伏せた。

ヘルガはゾイドの健闘を称え、握手を求めるがゾイドはそれをやりわり断り去っていった。

ゾイドの気持ちはよくわかる。友の名誉を守る戦いで、何もできずに負けたのだ。

悔しくないわけが無い。

俺はいてもたってもいられなくなり、足を進める。

その後、ヘルガにケンカを売った俺はぼこぼこにされ現在部屋で療養中だ。結果は記すまでも無い。

水の秘薬が使われたがそんな金があるはずも無い。ヘルガの奴がくれたらしいが、礼なんか言うつもりは無い。俺の無念は水の秘薬なんかで晴らされることは無いのだから。

そしてジャンは学院を去った。

決闘・トリステイン魔法学院（後書き）

戦闘シーンは難しいです。

攻撃魔法なんてあんまり知らねーよお。

ラインにしては弱すぎじゃね？って意見は無しでお願いします。

質より速度を優先した結果と思ってください。

主人公がゾイドと違ってボコられた理由はゾイドの態度に腹が立ったから。

また、決着後に周囲の人からも制裁を受けたのです、きっと。

次はワルドさんが学院を去るお話。

また読んでください。

同期のサクラ

学院を辞める。

部屋に見舞いに来たときにジャンは言った。

噂のせいか。

理由を尋ねたが返ってきたのは予想と違う答えだった。

「実は先日、婚約したんだ」

親同士の口約束だけどねと続ける。

聞けばお隣のラ・ヴァリエール公爵の令嬢なのだとか。

「え？それって上のほうの？」

だとしたらご愁傷様としか言いようが無い。

「いや、一番下の三女だよ。」

三女。

そういえば聞いたことがあるような。

「俺の記憶が確かならまだら歳だったと思うが？」

「うんあつてるよ。」

聞けばこれは試験なのだそうだ。婚約は正式に発表されたものではない。

三女・ルイズが成人するまでに相応の地位を得たとき正式に婚約がなされるのだという。

「僕は軍に行く。」

それがもつとも出世に近い道だから。

宮廷での出世は人脈と金があるを言う。どちらもワルド子爵家には足りない。

「俺も、いつか軍に行く。先に行って待っていてくれ。」

「ああ、その時は俺の部下として使ってあげるよ。」

ジャンが自分を『僕』ではなく『俺』といった。

いつも俺の口調が汚いと叱っていたあいつが。

ジャンが部屋を去ったあと、俺は声を上げずに泣いた。友のために何の力になってやれない自分が悔しくて。

たとえば、ウィルズス家の力を使えば宮廷でも出世できただろう。ジャンはそれを頼まなかった。実は高いプライドが、人の手を借りることを嫌ったのかもしれない。しかし、俺にそんな力が無いと判断した可能性もある。事実無い。

それが無性に悔しい。友に頼ってすらもらえない。俺はそんな存在だ。

しばらくして再び誰かが訪れた。

ゾイドだった。

「やあ、随分やられたね。」

「嫌味か？」

「まさか。君が何故勝てない勝負を挑んだのか知っているからね。」
恐らく俺の顔は醜くゆがんでいるだろう。

改めてあのときの屈辱がよみがえる。

ゾイドはその健闘を称えられたが、俺は無様に罵られただけだった。

「本当にひどい状態だったんだ。ジャンも心配してたよ。」

「そのジャンが学院を辞めるらしい。」

思わず出た。

「・・・知ってる。」

ゾイドの口調は重い。そうかこいつも知っていたのか。

「実はそのことで話があったんだ。」

ゾイドの語る話は俺が全く知らなかったことだった。

「彼の母はアカデミーに所属している学者だったが、最近心を患って療養中らしい。しかし、退職前の彼女の言動が余りに常軌を逸し

ていたために、今、ワルド子爵家の評判はすこぶる悪い。彼はその汚名を払拭しなくてはいけない。そのための婚約であり、そのための入隊だ。彼は既に家を背負って発つ決意をしたんだ。」

そこにきてこの噂。ゾイドがあれほど怒っていた理由がわかった。

「実は私も学院をやめて軍に入ることになった。」

俺はぎよつとしてゾイドを見る。見えないけど。

「今回の決闘が問題になってね、退学処分だよ。ああ、安心してくれ。君はお咎め無しだ。私が首謀者だからね。まあ、卒業後はどのみち軍に入る予定だったんだ。それが早まるだけさ。」

簡単にいうが、学院退学は重い。間違いなく俺の分をかぶったんだ。「すまない。」

「よしてくれ。言つたら？君の気持ちはわかると。私が不甲斐ないばかりに迷惑をかけた。私は彼に決闘を申し込んだ時点で覚悟はしていた。父上にも進退願を送ったしね。まあ、父上からはお咎め無しだったからそれでいいさ。」

ゾイドはそういつて去っていった。友が二人同時に去っていった。これが学院に入学してわずか2ヶ月のことだ。

同期のサクラ（後書き）

決闘して退学処分。

これが重いか軽いかは皆さんの判断に任せます。

次は話が飛ぶかもしれませんが。

これからも応援よろしくお願いします。

祇園精舎の鐘の声

「人は皆、生まれながらにして平等である」とは誰の言葉だっただろうか？

日本の中学生のとき（小学生だったか？）に習った事である。すばらしい言葉だ。

この後にフランス革命は起きたんだっけ？

だがそれをハルケギニアで言うとうどうなるか？

答え：

はぶられる

だけではすまなかったのです。

ゾイドVSヘルガ（おまけで俺も）の事件から半年。その間に周囲はどうなったか。

まずジャン。

自主退学後、軍に入る。

現在見習いとして先輩にこき使われているもよう。

次、ゾイド。

退学処分を受けたあと、ジャンと同じく軍へ。
残念ながら所属は違うらしい。

俺のこと。

2人が去った後、友達ができません。

1ヶ月ほど治療のために部屋に引きこもってたこともあるけど。

さてこれからが本題。

舞踏会でモテモテ振りを発揮していた例のゲルマニア人。

その後、さらに大勢の女性に囲まれてハーレムを築いていると思う
だろうが、今では取り巻きはほとんど居ない。

理由はさまざま。

エレオノールのようにゲルマニア人という理由だけで嫌う女性も居
たが

こちらはごくわずかだった。

理由のほとんどは彼の言動だろう。

彼の逸話をいくつか紹介する。

まず彼は学院の食事について改善することを要求した。

もつと質素にしろと。

曰く、生徒が食べきれないほど料理を作るのは金の無駄だし、作っ
た料理人や農家に失礼である。

まあ、いいたいことはわかる、が誰からも賛同を得られなかった。
生徒は普通に贅沢がしたいだけだが、教師には言い分がある。

平民が貴族にないを求めているか。

人によって意見は分かれるだろうが、消費が一番大きいだろう。

領主の生活を見れば領地の経営状態がよくわかるとよく言われている。

景気のいい領地の領主はやはり羽振りがいい。

ただ領民から搾り取るだけの領主はその生活に不自然さが出てくる。ここからは、難しくなるので省くが貴族は収入分だけ消費するのも大切なのだとか。

小金をためるのは商人のすることである。

また、消費することが領民のためにもなる。

たとえば食卓に並んでいるリンゴ。

色といい形といい艶といい、もちろん味も最高だ。

学院では基本的に金をかけていい食材を扱っている。

値段も最高級だ。

飯にこれをやめたとしよう。平民でも食べるような二級品に落とす。するとどうなるか。

一級品のリンゴが売れ残る。場合によっては二級品のリンゴと同じ棚に並ぶことになる。

すると売り手側も二級品の値段で一級品を売るので損だ。

そしてその損は税収にも関わってくる。

またそれは一級品のリンゴを作った農家の努力を無にすることと同じことになる。

せつかく作った一級品おリンゴを二級品として扱わなければならないのだ。

彼らの仕事に敬意を払うなら相応の報酬が支払われるべきである。

教師は丁寧に説明した。

教師として、生徒を正しく導くために。

言われたほうは自分が正しいとまったく受け入れる様子はないが。

次に彼が他の生徒に注意した。

曰く、自分の洗濯物や部屋の掃除は自分でやるべき。

メイドは学院に雇われているが、生徒個人の世話は仕事に含まれていない。

自立心を養うために自分でできることは自分でやったらどうか。

彼女らを平民だからとあごで使うような真似はするな、と。

これには反論できる生徒が少なかったようだが、当のメイドから苦情が来た。

彼のいうとおりメイドの仕事には生徒の部屋の掃除や洗濯は元々含まれていない。

これには理由があり、魔法でロックされた部屋を空ける手段が彼女らには無いのが一つ。

それでもその仕事ができるのは生徒から頼まれるからである。有料で。

彼女達の給金は平民にしては格段に高い。

それは礼儀作法や教養が求められるからであり、雇い主がそれを支払うことを苦にしないからである。

しかし、その給金が全額彼女の元に行くことは無い。

日本のように市民税や福利厚生費などではない。

まず彼女らの雇用に至る経緯から説明しよう。

ジェシカというメイドがいるが、彼女は領主の推薦でここに雇われた。

しかし彼女や家族にそんなコネはない。彼女の両親はまず、村長に相談を持ちかけた。

村長は懇意にしている商人に頼み、商人がコネのある貴族に頼んだのである。

そこから領主に話が行き、教育を受けた上で採用になった。

ジェシカが雇われるまでに大勢の人が関わっているのである。給金もまた、多くの人に謝礼として支払われている。

まず、ジェシカが雇われたとき、推薦人と学院の間に契約が交わされ、

ジェシカが問題を起せば推薦人が責任を取るようになっていく。そのかわり、契約金として推薦人に大金が支払われた。

これはジェシカが一定期間勤めたときに受け取る給金の前払いである。

つまりこの契約金は全額ジェシカの物だが、推薦人はここから紹介料や教育費をと取っていく。

中継した人が多ければ多いほどジェシカの家族の元に届く金額は減って行き、結果、ジェシカは5年間ただ働きをしなくてはならない。ひどい話だが、それでもジェシカに不満は無い。

それでも一般の平民よりはるかにいい生活ができていくのだから。

まず衣・食・住が保障されていること。

平民には隙間風の多い、犬小屋のような家も多い。

学院では住み込み、つまり簡素な部屋ではあるがづくりのしっかりした家で寝ることができる。

食事も賄とはいえ貴族に振舞われる最高の食材を食べられる。

衣類はメイド服だが支給される。

また、生徒が着古した衣服を捨てることもあり、

処分を頼まれるのはやはりメイドなので彼女らはその生地を使って自分の服を仕立てることもある。

さらに、給金とは別に収入源があるため。

これが、生徒の個人的な願いを聞いた報酬である。

生徒は貴族なので支払われるチップはもちろん金貨。

掃除1回、洗濯1回で平民の平均年収1年分を稼げるのである。

こんな仕事は他には無い。

その大事な収入源が減らされるのである。冗談ではない。

この件を期に、メイドからの評価は『平民にも優しい貴族』から『余計なことをしてくれる厄介者』に変わった。

他にも多々あるが、その言動全てがハルケギニアの常識には合わないため、やはり所詮は田舎のゲルマニア貴族と思われるようになった。

さらに悪いことに、彼の言動がなぜかブリミル教会にまで届き、彼と彼の家が神官から異端の疑いをかけられた。

その影響で彼の家はガタガタ。もうすぐ潰れるかもしれない。

ハルケギニアの政治経済を21世紀の地球と比べると違うことが多すぎていまいち理解できかねることが多いが、優越で考えると地球に劣っているとは言いがたい。6000年間、政治も経済も大きく動きながら発展してきた。そこには先人の知恵があり、合理的にできているのである。決してバカにはできない。

地球では全てシステマチックに作り、管理のしやすさを求めたが、ハルケギニアは懐がでかく、柔軟性に富む。

人によって同じ仕事にも差があり、一見して不合理に見えるが、それが逆に差別化につながり競争力につながる。常に最高のリンゴができればみんな喜ぶわけではない。最高のリンゴが増えれば、最高だったリンゴの価値は下がるし、普通のリンゴがゴミのように扱われるようになる。

まあ、素人が口出しできることではない。

俺にも何もできないけど。

地球出身の俺としては彼の考えのほうがりやすいのだが、

祇園精舎の鐘の声（後書き）

1巻でルイズがサイトに洗濯をさせていたところから考えた設定。

メイドだから給料がいい訳ではないのです。

補足

メイドが逃げた場合、学院から推薦人に違約金請求が来ます。
しかしそれを支払うのは推薦人ではなく逃げたメイドの家族。
この辺はシビアに。

次は進級させます。

別れ、そして出会い

ヘルガ退学後からおおよそ1年。

特に何もなく俺たちは進級した。

そして進級といえば『使い魔召喚の儀式』である。

その前に、進級に伴い起きた身の回りのことを話そう。

まずは卒業。

就学年数が決まっているわけではないが、おおよそ3年で皆卒業していく。

わが兄、ロイドも卒業。そしてめでたく婚約。

お相手は

カトリーヌ・ウェンディ・ド・マルコネスク。

ド・マルコネスク家は現伯爵家だが歴史は古く、今もなお王家との結びつきは深い。

しかし、近年領地経営が行き詰まり、娘婿に我がウィルズス家に援助を求めている。

この婚姻は外交の役割のほう大きい。

まあ、我が兄には軍入りを先送りする免罪符に過ぎないのだが。

さて、この婚約に憤慨しているお方が一人。

恐れ多くも公爵令嬢、エレオノール様である。

兄貴の本命は彼女だったようでかなり執拗に迫っていたらしい。

彼女も受け入れる気はなかったが、まんざらでもなかったようだ。ところがここしばらく何もこないと思ったらこの発表。

実は二股（この表現は正しいのだろうか）をかけられていた事に気づき、

プライドの高いトリステイン女性らしく激怒。

本人がいなかったため俺のところに文句を言いに来た。

しかし、彼女の不満は兄貴一人のせいではなさそうだ。

彼女は公爵家を継ぐことが有力視されていたため交際の申し出は（その性格の苛烈さにも関わらず）実に多かったそうだ。

ところが突然パタッとこなくなった。

理由はひとつ

彼女が公爵家を継がないことが決まったため。

めでたくも先月、公爵家には男子が誕生した。

ラ・ヴァリエール公爵には待望の男子だったらしく生まれて間もない赤子に次期当主の座を与えた。

これによりエレオノール嬢のもつブランド価値（それもきわめて重要な）が失われたのである。

俺の部屋で散々わめき散らし、自分が何の価値もない女なのかと泣き出したときはどうしようかと思った。いや、本人は泣いていないと言い張っているが。

まあ、本人は弟ができたことに喜んでおり、次期当主の重荷が取れて気が楽になったといっている。

「これで気兼ねなくアカデミーに行けるわ。」

さて、使い魔の召喚である。

今も教室中でその話題で盛り上がっている。

みんなこんな使い魔が欲しいと色々あげている。

一番人気は鳥系である。

鳥は風系統と思われがちだが実は使い魔と属性に関連性はあまりないそうだ。

土系統なのに魚を召喚した物もいたらしい。

女性に人気なのは小動物系。

まるでペットだが、まあ一生のパートナーである。可愛い方がいいだろう。

意外と人気がないのがドラゴンや幻想種。

高い身分のものほど嫌がる。

理由は現実的なもので、食費等の世話が大変。

ドラゴンなんて小さいものでも1日牛1頭食べるそうだ。

さらに竜種は寿命が長い。それ程長い時間を世話すると食費だけで家が潰れる。

後は家の伝統とか縁の深い生き物が希望として挙げられている。

俺の希望は当然ジャイアントワーム。

次期当主の条件である。

逆にそれ以外を呼んだ場合、どうなるのか。

怖くて想像だけで死にそうだ。

別れ、そして出会い（後書き）

久しぶりの更新です。

今後よろしくお願いします。

ファーストキスから始まる

そしてとうとう使い魔召喚の儀式。

結論から言おう。

ジャイアントワームではありませんでした。
では何かというと、

ヒント

肉食で単独生活が多い

ヒント2

一般的に毒を持ち人が絶命すること

ヒント3

足が8本

ヒント4

目が2つではありません

ヒント5

メスがオスと食べることがよくあります。

正解は クモ

はい、キスをした後に教えられて始めて気づきました。

目が見えなくて本当によかったです。
今でもかなり気持ち悪いです。

かなり鬱です。

始祖以来、蟲を使い魔にした人はいただろうが、よくキスができたものだ。

それとも失われただけでキス以外の方法があるのだろうか。

そもそも使い魔召喚の儀式そのものが失われつつある伝統である。
はつきりいつてここ、トリステイン魔法学院以外で行われることがほとんどない。

それも貴族がこの学院に入れる理由でもある。

理由は諸説あるが、王族がやらないことが大きい。

何せ貴族社会のトップだ。

ほかにもトップに倣う。

王族がしない理由は何を呼び出すかわからないことが大きい。

ガンダールヴなどの始祖の使い魔ならいいが、たとえばカエルだとしたら。

その王様はカエルの王として屈辱に震えることだろう。

使い魔の良し悪しではなく、トップにはそれなりの押し出しが必要なのである。

結果は実家にも送ったが、今日はもう何もする気が起きない。

ふと部屋の隅に気配を感じる。とわが使い魔が糸を張って巣を作り始めているのだろう。

蟲に感情はないと言われているがどうやら本当のようだ。

ただ自らの本能にのみしたがっているのだろう。

ファーストキスから始まる（後書き）

短いですがここまで。

主人公の使い魔の候補はいくつかありましたがクモにしました。

次は使い魔について語ろうと思います。

クモが嫌いな方は飛ばしてください。

青は藍より青し

クモ

肉食でその容貌から恐ろしいイメージがあるが

捕食対象は自分と同程度の大きさであり、自分より明らかに大きい生き物からは逃げる傾向にある。

ほぼすべて毒を持つが、そのほとんどの種は致死性はない。

毒クモとして知られるタランチュラもそつと掴めば刺すことはないそうだ。

基本、病害虫を捕食してくれるので家の領地では益虫として扱われている。

地球でもペットとして愛好かもいる。スペースも要らず、えさも安価で世話に手間もかからない。

がしかし、それでも限度はある。

例えばハルケギニアにおいてある意味オーク鬼よりも恐れられている通称ブルーカーペット。

その名のとおり体毛が青いことからつけられた。

体長は約1メートル。中型哺乳類はおろか人やオーク鬼すら食べる。

口から出す糸は鋼より硬く強い粘着性を持ったため人の力では抵抗できない。

肢に持つ毒は神経毒だが体内に入れば即死する。発見しだい駆除の対象。

まあ、わかるだろうが俺が召喚したのがそいつだ。

また幼いようで大きさは30 سانت程度。それでも地球で考えればかなり大きい。

儀式で召喚したのでなければ駆除されたことだろう。

契約で使い魔との繋がりができたせいかわい使魔に愛着がわいてきた。名前もロビンとつけた。

残念なのがこのロビン、オスなのである。

オスは繁殖期に入ると絶食しだし最後には餓死するらしい。その分メスは長生きするらしいが。

つまり、このロビンとも短い付き合いということになる。

その日を思うとさびしくなる。

使い魔ができた変わったこと。

まずは周りの評価。

大幅にダウンである。

ただでさえクモはその容貌から嫌われているのによりによってブルーカーペットである。駆除されないだけましだろう。

また、クモを召喚したことで俺の性格も憶測を呼んでいる。

具体的には悲しすぎるのでやめておく。

次、俺のウィルズス家での立場。

父上からは卒業後、軍に行く準備をするよう手紙が来た。

期限やその後のことは書かれていない。

ジャイアントワームを召喚できなかった以上家督は継げないだろう。

そして、使い魔との感覚の共有。

実はかなり楽しみにしていた。

視力を失って十数年。

目が見えるようになりたいとどれほど願っていたことが。

魔法的な治療で無理ならせめて使い魔を通して世界を見たいと思っていた。

そしていざ実行してみた。

正直、虫を舐めてました。

クモは眼が8つある。

これは単純に人間の4倍の視野と考えないほうがいい。

頭に入ってくる視覚情報が4倍に増え、それを処理するのがものすごいしんどい。

なんというか、人と主では感覚が違いすぎて困る。

なれるまでまだまだ時間がかかりそうだ。

まあ、じっくりやっつけていこう。

青は藍より青し（後書き）

サブタイが思いつきません。

まだまだ続けます。

応援よろしく願います。

決闘・2回目

「諸君、決闘だ！」

ヴェストリの広場でクラスメイトが声高々に宣言した。
顔を真っ赤にしている。
相当怒っているのだろう。

なにせ大事な使い魔が死んでしまったのだからそれも当然か。
しかも殺されたと思っているのだから。

その矛先が自分でなければ好きにしてくれといたい。

簡単に言えば、彼の使い魔が死んだ、その原因が俺の使い魔だとい
うのが彼の言である。

勘違いしないで欲しい。

確かにうちのロビンは凶悪なブルーカーペットだが、ここ数日は何
も食べていない。

少し前に感覚の共有していたとき運悪くロビンが食事中で味覚を共
有してしまったために変なトラウマができてしまった。

以来食事は俺が直接与えたもの意外は食べないように命令していた
のである。

閑話休題。

彼の使い魔の死因はロビンが捕食したせいではなく、その逆、ロビ
ンを捕食したせいである。

所詮は虫。生態系では底辺に位置している。

1メートル級のブルーカーペットは実は少ない。

大きくなる前に外敵に捕食されてしまうからである。

が、1メートル級のブルーカーペットが10匹もいれば軍隊すら太刀打ちできないといわれているが。

話を戻すと30サントのロビンは食べごろだったようで彼の使い魔（鳥だったようだ）がぱくつと食べてしまったのだ。

ロビンは一矢報いるために足で刺し毒を注入。

両者共倒れとなった。

はつきり言って襲い掛かってきたあつちが100%悪いと思うのだが、鳥とクモでは心象が明らかに傾くらしく、なぜか周りからも俺のほうが悪いように言われてしまった。

謝罪を要求されて断ると決闘を申し込まれた。

そして冒頭の台詞につながるわけである。

やれやれ、2年連続で決闘騒ぎになるとは。

今度は退学にされるかも。

決闘・2回目（後書き）

決闘相手の名前が出てませんが、
次回は決闘がメインで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2460q/>

転生してお先真っ暗

2011年7月13日18時12分発行